

地域子育て支援センターを始める方々に－ 3

宮崎栄樹

地域子育て支援センターへの疑問・批判・提案（外部の関係者から）

3-1 公的子育て支援（公立私立を問わず）への「子育てサークル」側からの疑問

- ① 子育て支援関係者の意思統一不全（親達に説教してしまう主任児童委員）
- ② 子育て支援センターは孤立して育児不安とストレスに苛まれる「個人としての親」を主な対象として意識しているように思える。親同士をつなげようとしているのだろうか。「親の主体性を育てよう。」という課題意識はあるのだろうか。
- ③ 子育て支援センターに行ける人達が限られた一部の人達である事に気付かず、子育て支援センター関係者は自己満足していないだろうか。地域全体を見ろという視座に立っているのだろうか。
- ④ 園庭開放や無料のイベント・過剰なサービスは、「目立ちたくない」「お客さんでいたい」若い親達の依存傾向を一層助長し、自発的な活動が必要な子育てサークルから彼らを引き離してさえているのではないか。
- ⑤ 親のストレスが解消されればいいのか、乳幼児期が無事過ぎればいいのか。
- ⑥ 思春期を見通した子育て支援がされているのか。
- ⑦ 子育て支援センターは、直接的な育児体験が今の日本の親達に欠けていることを認識しているのだろうか。
- ⑧ エンゼルプランに言う「子育てサークルの育成支援」が、人と人がつながりやすい条件作りを援助するソーシャルワーカーを求めていること。個人還元的になりがちなカウンセラーと違って、相互的なやりとりも時に求められるソーシャルワーカーとしての行動を、支援センター指導員に求めていることが認識されているのだろうか。
- ⑨ 子育て真っ最中の母親が、専門家よりも先輩母親を先ず頼むということをヒントとして考えるなら、どのような企画が可能だろうか。

（参考文献 原田正文著「子育て支援とNPO」朱鷺書房 2 3 0 0 円）

3-2 カウンセラーからソーシャルワーカーへ

学校でも子育て支援センターでも大流行の「カウンセリング」「心の専門家」。

その原因は

- ① 欲望は即座に満たされ、悩みは即時に解決されるべきだとする考え方。
- ② 自己肯定・自己確立・自己実現への強い願い。
- ③ 学校や社会における個人評価と選別の激化による相互不安・相互不信。
- ④ 地域共同体の連帯のほころびに伴う人間関係体験の不足。

カウンセリングは怒りや不安を鎮める。手に負えないやっかいな感情をなだめ、穏やかに適応に導く。あらゆる問題を個々人の感情や内面の問題として処理し、解決に導いてくれる。人の生活全体に起こっている問題を、本人 1 人の内心の問題として解消して、カウンセリングは終る。

しかし実際は、自分の意見・感想を原則として語らない密室のカウンセラーよりも、生活経験の豊富な非専門家、専門家よりも先輩の母親の体験、高い山から眺める「プロ」よりも「低い丘」にいる「セミプロ」、生活の中で信頼される年長の人達の、共感や助言や振る舞いこそが若い母達に頼りにされる。

傾聴・受容は「繰り返し・自己感情の明確化」のトンネルを避けて、共感の広場から相互援助・相互扶助を踏み台にして共同行為へと進むのが快い。それは人間関係体験のやり直しであり、相互信頼・自己の未来への期待の回復の道である。人生のプロセスを楽しみ、じっくりと自己実現を期することが出来ることでもある。

生かされるだけでなく自ら生きること。受け身で生かされることから、自分の身体から生きること。このことは次のファシリテーションの目差すところにつながっていく。

(参考文献 小沢牧子著「心の専門家はいない」洋泉社 700円)

3-3 カリスマからファシリテーターへ

① カリスマからファシリテーターへ

カリスマのような専門家としてでなく、周知を集め誰も予想もしなかったアイデアを、参加者の納得づくで生み出せる技術者／「押し黙って聞くだけの場より、参加したり体験したりお互いに話したりする方が、楽しくて身に付く

② 「人と人をつなぎ、人を育てる」50 年来の社会教育・生涯学習の理念への回帰参加型のワークショップ(研究会)の要点

- ア ワークショップに先生はいない。
- イ 「お客さん」もいない。
- ウ 初めから決まった答えなどない。
- エ 頭が動き、身体も動く。
- オ 交流と笑いがある。

③ 「孤立無援」「かりそめの忍耐の日々」の母⇒「知ることよりも感じること」「不思議さや神秘さに目をみはる感性」(レイチェル・カーソン)の母たち(中野民夫 著「ワークショップ」岩波書店)

- ア「孤立した心」から「内面のつながりを感じ合える仲間関係」へ
 - ・受容と共感を求めている。(悩みや不安を話したい聞いて欲しい。)
 - ・仲間を欲しい。(あれこれ考えずに、私を取り戻せる人の輪の中にいたい。)
- イ「何かをしる」と脅迫される自己から「今ここにあることを楽しむ自己」へ
 - ・息抜きをしたい。(親でない、1人の女性としての時間を今20分持ちたい。)
 - ・無我夢中でなく見通しを。(1ヶ月先の育児の見通しが耐え難さを軽くする。)
- ウ「殻の中で油断なく身構える自己」から「自他に正直であり得る自己」へ
 - ・自尊心を取り戻したい。(育児する私・子育ての素晴らしさを認めて欲しい。)
 - ・真の自信への到達(やるしかない。この子には私しかいない。)

④ ファシリテーション・ワークショップが目指す「母たちの変身プロセス」

- i 心身を癒し内面を深める。あるままの自己に居直り沈潜する。
- ii 感じたことを自己に向けて表現し溢れさせる。
- iii 自然・社会・仲間の内にその身を置く。体験し感想を持つ。
- iv 社会を支え、再建し、変革するための行動を出来ることからする。

半年経っても「心がジンジンする！」と参加した母達に言われる講座を。
(参考文献 中野民夫著「ファシリテーション革命」岩波書店 740円)